

東京藝術大学 COI拠点

素心伝心

クローン文化財 失われた刻の再生

文化共有



東京藝術大学COI拠点は2013年のトライアルから継続して、東京藝術大学が持つ文化財複製特許技術をベースとした文化財複製・復元事業を大きな柱とし、研究開発と展覧会による成果発表を行ってきた。今秋、これまでの研究の集大成として、山陰中央新報社、公益財団法人しまね文化振興財団とともに、シルクロードの文化遺産をテーマとした特別企画展「素心伝心〜クローン文化財失われた刻の再生」を東京藝術大学大学美術館で開催し、有料催事ながら同館の平均入場者数を大きく上回り、37,393人もの観覧者が訪れ好評のうちに幕を閉じた。

開会式および内覧会には100社を超えるメディアが取材に訪れ、特集番組やニュース番組にて展覧会の様子が放送され、新聞や雑誌、インターネット含めて、多くのメディアにて放送・掲載された。

クローン文化財として再現する作品はいずれも唯一無二の歴史的・芸術的価値が認められながら、惜しくも失われていたり、実物を鑑賞することが難しい遺跡ばかりである。今回の展示作品の一部は、株式会社竹尾と共同で研究開発しているクローン文化財印刷紙を用いて制作した。また、本拠点の中心企業である株式会社JVCケンウッドと参画企業のヤマハ株式会社、立命館大学COIアクティブ・フォー・オール拠点が音響システムに協力し、シルクロードをイメージした音楽（作曲：千住明）や法隆寺の読経を展覧会場で併せて展示した。会場内には小川香料株式会社が特別に制作した香りを漂わせ、五感でシルクロードを体感できる試みを実施した。

本展覧会を皮切りに、来年度より全国各地でクローン文化財展を巡回し、文化財の保存と公開のジレンマを解決する手段として発信していく。

(→中面へ続く)

TYOJTE

Vol.11

Arts & Science LAB. COI news

発行：2017年12月19日
編集：荒井経、保敦理和子、梶持由起夫
制作：平論郎
発行者：東京藝術大学COI拠点
東京都台東区上野公園12-8 東京藝術大学 Arts & Science LAB.
Tel:03-5525-2464 Fax:03-3555-8709
Mail:coi-info@ml.gedai.ac.jp Web:https://innovation.gedai.ac.jp
紙：F・S

(表紙記事)

「素心伝心 クローン文化財 失われた刻の再生」

会期：平成29年9月23日(土)～10月26日(木)
主催：東京藝術大学、東京藝術大学シルクロード特別企画展実行委員会、山陰中央新報社、公益財団法人しまね文化振興財団
協賛：株式会社サンエムカラー、東京モノレール株式会社、株式会社東京スタデオ、株式会社谷中田美術、株式会社データ・デザイン、ジャパンドームハウス株式会社、有限会社よしくに、株式会社スペースネコカンパニー、ni、印牧洋介設計
企画・制作：東京藝術大学COI拠点・ユーラシア文化交流センター・アートイノベーションセンター
後援：株式会社共同通信社、公益財団法人全日本仏教会
特別協力：公益財団法人 平山郁夫シルクロード美術館、立命館大学COIアクトタイプ・フォー・オール拠点、株式会社JVCケンウッド、ヤマハ株式会社、株式会社竹尾、小川香料株式会社、400年を超える高岡市の鋳物技術と600年を超える南砺市の彫刻技術を活用した地場産業活性化モデルの構築・展開事業推進協議会
助成：日本万国博覧会記念基金、国際交流基金アジアセンター、一般社団法人 東京倶楽部
特別制作協力：敦煌研究院、法隆寺



photo:KIOKU Keizo クローン文化財：敦煌莫高窟第57窟

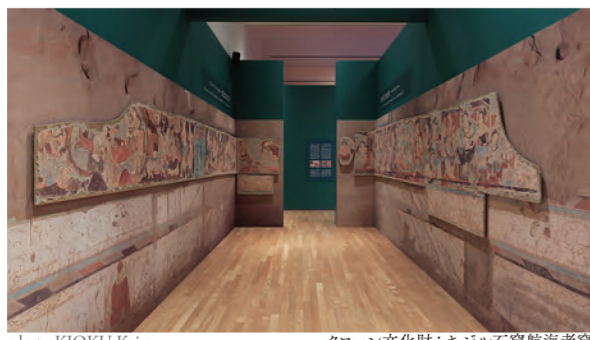
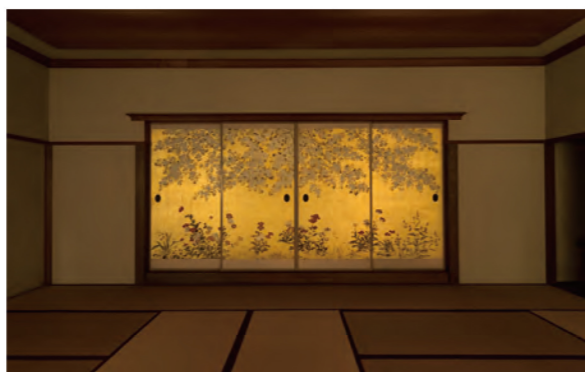


photo:KIOKU Keizo クローン文化財：キジル石窟航海者窟



photo:KIOKU Keizo クローン文化財：バーミヤン東大仏天井壁画



大田区立龍子記念館
伝使屋宗達《桜芥子図襖》の複製と活用

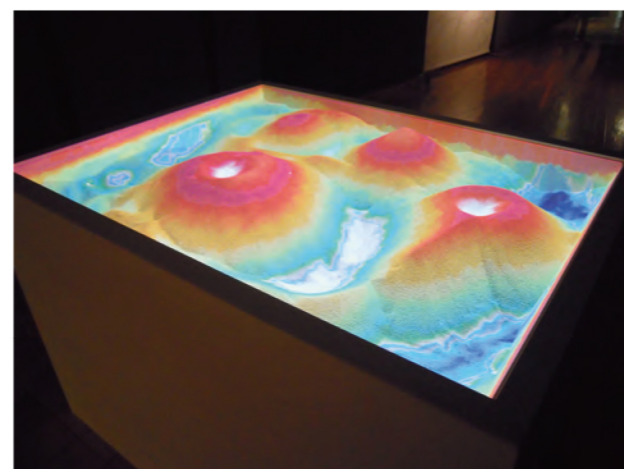
《桜芥子図襖》は日本画家・川端龍子旧蔵の作品で、邸宅内に建造した持仏堂の仏間間仕切りとして設置していたが、現在は取り外され、大田区立龍子記念館収蔵庫にて保管されている。この度、同襖絵を超高精細デジタルカメラおよび超高精細3D計測機器により撮影しデータをアーカイブするとともに、原本と同質感のクローン文化財を制作した。制作したクローン文化財は、川端龍子没後50年記念展覧会にて展示し、その後は邸宅内持仏堂の襖として常時公開される。

共感覚メディア

視覚＋触覚の体験展示

メディア技術を応用した体験型作品は、視覚、触覚など複合的な感覚を引き立たせ、より鮮やかな体験を提供することが出来る。なかでも科学的教材との親和性は高く、科学的な見識に基づくサイエンス・コンテンツの体験型作品は「遊び」という鑑賞者の豊かな感性を投影しながら、同時に「学び」の機会として両立するものとして位置付けることができる。共感覚メディアコンテンツとして制作した「ダイダラの砂箱」は砂場の隆起レベルをリアルタイムで色彩や等高線に変換し、山や谷などの地表の起伏を表す地形表現方法の概念を遊びを通して体感する作品である。平成28年度には21_21DESIGN SIGHTで開催された「土木展」の作品展示から継続的に展示を展開し、障がいと表現研究グループとの共同で開催している「発達障がいワークショップ」にも療育的応用として体験の場を設けている。そうした継続した取り組みとして平成29年度は群馬県立自然史博物館で開催された企画展「ぐんまの景観がこんなにも素晴らしい5つの理由」にて展示を行った。博物館での展示は子どもを中心とした鑑賞を意識したもので、地質学でも重要な概念である等

高線や地形の隆起の表現を、砂場で実際に遊びながら学習する体験的な科学教育として実装している。専門性の高い地質学的な展示との共鳴から来場者の反応は非常に良く、科学知識の延長にある体験学習として今までにない新鮮な反応も寄せられた。科学コンテンツを制作する上で視覚と触覚の複合的な感覚を伴わせるだけでなく「遊び」の場として形作ることの重要性と、手法的な適正さに確かな手応えを感じ取った。



ダイダラの砂箱

Summer Arts Japan 2017・憂飼

国際シンポジウム

「共に生きるスポーツとアーツの可能性」

2020構想グループは、8月6日に奏楽堂において「Summer Arts Japan2017」を、9月29日に第6ホールで国際シンポジウム「共に生きるスポーツとアーツの可能性」を開催した。

「Summer Arts Japan2017」(beyond2020プログラム)は、音楽、スポーツ、科学が織り込まれた夢枕獭氏書き下ろしの

七夕伝説「憂飼」を小さなオペラに仕立てた。車椅子と健常者それぞれのバトミントン選手に取り付けたセンサーから取り込んだ動きのデータを音楽に反映させた、オーケストラとアスリートの「共演」は、今回の新たな試みとして好評を博した(SASプログラム/立命館大学、順天堂大学との連携事業)。舞台終盤では、ヤマハの自動演奏システム(スネア)、電子楽譜システムやブラザーのエアースカウター(ヘッドマウントディスプレイ)を用い、譜面台から解放されたオーケストラ演奏者と林英哲氏(和太鼓)がラベルのボレロを演奏した。

国際シンポジウムは、日本財団パラリンピックサポートセンター、

「だれでもピアノ」ワークショップ
～ 渋谷ズンチャカ!



<渋谷ズンチャカ!>は渋谷の街中で誰もが自由に音楽を奏でる「1日だけの音楽開放区」をスローガンとしたフェスティバルで、2014年から毎年開催されている。今年は9月3日に行われ、「障がいと表現研究グループ」が渋谷マークシティ1階イベントスクエアに「だれでもピアノ」と題したワークショップ・コーナーを設けた。我々グループとヤマハ株式会社とが、手足に障がいのある高校生のために改良・開発した自動演奏機能付ピアノDisklavier(演奏追従システムとペダル駆動装置を装備)を展示。街行く人々がこのピアノを体験することによって、演奏の楽しさを通じて障がいに興味を持ってもらうことを目的とした。2015年の開発時点では、右手のメロディをピアノで弾くと左手の伴奏は別のキーボードから出る仕組みになっていたが、今回は体験者が弾く同じピアノから伴奏も出るように新たに改良された。体験楽曲は初級・中級・上級と分けて「きらきら星」、童謡「ふるさと」、ショパン「ノクターン第2番」を用意し、指一本でメロディを弾くだけで豊かな伴奏が自動的に追従し、プロピアニストの気分が味わえるというもの。渋谷駅の真ん中で、幼児から高齢者、車椅子の若者、重度の障がいのあるストレッチャーに乗った女性、海外からの観光客までが「だれでもピアノ」を体験。一人の障がい者のために開発された楽器がユニバーサル・デザインとなった夢の1日であった。

2020構想

ベルリン日独センターと共催。スポーツやアーツを障がい者と共に楽しむことができる包摂的社会的実現に向け「3年後の東京パラリンピック大会はいかなる契機となり得るか」をテーマに、日本、ドイツ、フランスから招いた障がい者スポーツの専門家が講演を行った。登壇者全員によるパネルディスカッションでは、国内外の専門家の考えや状況の違いなどが披露され、活発に意見交換がなされた。これからもこれらのような藝大拠点ならではの成果発表を通し、共に生きる喜びを表現、感動の共有を目指し進んでいきたいと考えている。

SENJU LAB と RED U-35

東京藝術大学COI拠点
特任教授

千住 明

東京藝術大学 COIで僕が主宰している「SENJU LAB」は、大学の宝である若き芸術家の社会実装の可能性を模索し、様々なコラボレーションの中からワークショップを通して、新たな表現や社会に寄り添える作品を創造することを目的としている。数あるCOI拠点の中で、東京藝術大学は唯一の世界トップクラスの総合芸術、アーティスト、クリエイターの最高学府である。ここでやるべきことは新たな創造とそのサポートにある事と思う。僕は実用的な音楽業界でプロフェッショナルとして30年以上活動して来た経験を踏まえ、自分が藝大生だった頃に来なかった自由なコラボレーションと創造の場を提供したいと「SENJU LAB」をスタートした。それが社会に繋がってれば芸術家のチャンスも、日本文化の新たな可能性も広がる。それは僕を受け入れてくれた社会と母校に対する恩返しでもある。

今まで様々なジャンルの中で音楽を創って来たが、それぞれの世界でも同様な事が起こっている。今年から「RED U-35」という日本最大の料理人コンクールの審査委員に選ばれた。35歳未満の将来のスターシェフの登竜門となり、才能溢れる人材を送り出している、世界が目する料理界の活気あるコンクールである。総合プロデューサー小山薫堂氏のもと、脇屋友詞、落合努、田崎真也、徳岡邦夫、辻芳樹、鎧塚俊彦、孤野扶実子、生江史伸、黒木純、(敬称略)という間違いなく料理界のトップ達が揃い、その中に一人だけ作曲家の僕が混ざっている。単なる技術だけでなく、創造力や人間力を問うものであると理解して頂けると思う。

いくつかの音楽や映像のコンクールの審査経験を持って僕は料理界の若きクリエイター達と対峙する。その実力、才能、センスと野望の中から僕は芸術の息吹を確かに感じる。今年に応募総数488名から何回か振るいにかけて最終の5人が残り、人生をかけて戦う最終審査の真剣勝負は心に突き刺さる。その感動こそクリエイターが無垢に生み出すことの出来る最終形である。ジャンルは違っても追い求めるものの正体は同じである。その中で料理は社会に取り入れられる最先端であると強く理解した。今や世界中の星付きレストランの多くの店で日本の若き才能は光っている。世界が目する日本の料理界の厳選された若き才能、「RED U-35」を通過した料理人達とのコラボレーションを模索したい。



株式会社 JVC ケンウッド

山本 耕志 氏 :JVCケンウッド ブランド戦略広告宣伝部 部長

永野 浩嗣 氏 :ビクターエンタテインメント ストラテジック部 企画編成G

夕闇の迫る新子安、「JVCKENWOOD」の社名が輝くビルの10階へ足を踏み入れると、そこは落ち着いたインテリアの配置されたリラックススペース。開放的な窓からはくっきりと横浜の夜景が臨める。東京藝大 COI 開始当初からの中核企業で、2017年4月から拠点プロジェクトリーダーを務める山本耕志さん、今年から拠点運営に加わったビクターエンタテインメント永野浩嗣さんの2人を訪ねた。

— まずJVCKENWOODの3つの事業展開ブランドについて、簡単に教えてください。

JVCKENWOODのブランドはJVC、KENWOOD、VICTORの3つです。JVCは音と映像の分野で特徴ある商品や技術力を発信、ひとの感覚を高める新鮮な発想力で豊かな毎日を提案します。KENWOODは無線機器などの開発技術を基盤に、カーオーディオやビジネスシーンで「鋭さ」「先進性」「高品質」を追求、VICTORは長い歴史の中で培ってきた音と映像への探究心で新たな時代の創造を目指しています。

— 藝大拠点は、今やCOIプログラムにとって欠かせない存在になりました。プロジェクトリーダーや中核企業としての関わり方も少しずつ変化していますね。

(山本)当初はJVCケンウッドの有する技術や機器を活用できないか、とのスタンスで、Arts & Science LAB. 4階球形ホールの4K、8Kプロジェクタの技術提供などから始まりました。藝大拠点の活動が大きく認知され、参画企業が着実に増加する中、拠点運営面では大学と企業のバランスをとりつつ、JVCケンウッドとしても芸術家に寄り添い、ともに制作したコンテンツを社会実装へ結びつけるべく、ハード面からソフト面での協力へと歩を進めています。

— 今年から新たにビクターエンタテインメントにも参画いただきました。永野さんはストラテジック部で教材開発にも携わっているそうですね。

(永野)JVCケンウッド・ビクターエンタテインメントは、学校教育における音楽映像関連事業で長い歴史があります。藝大とのコラボレーションでは、教育部門を事業領域の一つと捉え、一過性ではなく未来へ続く音楽・メディアコンテンツの開発を目指しています。例えば千住明グループリーダーが主宰するSENJU LABには、藝大の学生さんのユニークなアイデアや視点が一杯で、新しい表現と教育の可能性に大いに期待しています。

— この秋に開催された文化共有研究グループ制作の「クローン文化財」による企画展でもご協力をいただきました。

「素心伝心」展では、大学美術館というこれまで「音の展示」がほとんど行われていない場所で、藝大の先生方と音空間の設計・展示

を行いました。クローン文化財でシルクロードを遡る旅を表現する作業は、普段会社の中では絶対に得られない貴重な体験でした。目で見るだけでなく、モノに触れ、香りを楽しむ、文字通り五感に訴える場の創出は、これからの「体験価値の提供」を先取りするものです。宮廻正明研究リーダーをはじめ、藝大の皆さんの表現力や発想力には大変刺激を受けています。

— 音、映像、教育などの領域では、他の研究グループともコンテンツ作成展開のコラボレーションが広がりそうです。

共感覚メディア研究グループとは、JVCケンウッドの要素技術の体験会と意見交換を行いました。障がいと表現研究グループとは、「ユニバーサルデザイン」をキーワードに、文字通り「障がい」という垣根を超えるコンテンツのあり方を、事業化の視点からも追求していきたいと考えています。

— 2020東京オリンピック・パラリンピックも近づいてきました。

藝大拠点の「2020構想グループ」も、東京に世界中から人々が集う場で、新しい時代の文化芸術コンテンツの発信を目指しています。同グループは海外演奏家とのユニークなコラボレーションを行っていますが、グローバル展開企業である私たちは、世界中の次世代の優れた音楽家育成支援も重要な事業の一つと考えています。若い音楽家の育成はやがて、未来の「文化芸術ファン」を育てることに繋がると思います。

— 山本さんご自身でもベンチャー起業のご経験をお持ちだそうですね。これからの抱負を聞かせてください。

(山本)会社では設計、ヒット商品企画、マーケティング、経営戦略、ブランド戦略などの業務を歴任。成長戦略では、日本ビクター(株)と(株)ケンウッドの経営統合をはじめとした複数のM&Aを経験。自らベンチャー事業を起業しカーブアウトした後、大きく企業価値を上げイグジットにも成功しました。藝大COIでも企業目線を大切にしながら、産学連携事業の効果を最大限に発揮できるよう、活動に取り組みたいと思います。